

漢語における濁音声母の帯気性に関する覚書

中村雅之

1. 北方方言における旧濁音声母の帯気性

中古音における全濁音声母すなわち/b、d、g、dz/のような有声音声母は、現代の北方方言ではすべて無声化している。その際、平声で有気音に、それ以外の声調で無気音になる。なぜ、声調によって帯気性に差が出るのか。筆者は以前、この問題についての私見を述べたことがある。ただし前稿(中村2007)は、カールグレン学説の解説という目的で執筆したために、記述がやや簡潔に過ぎた嫌いがある。今回は前稿の要点を再録した上で、関連項目を補足することにしたい。

2. 帯気性保持と調値の関連

---以下、中村(2007)より引用---

カールグレン、マスペロ両氏が触れなかった問題として、多くの現代方言に見られる無声化の状況(平声で有気、他の声調で無気)がいかなるメカニズムで形成されたのか、という問題がある。カールグレンが考えたように、無声化の前段階として、平声で有声有気音、他の声調で有声無気音である段階を想定しなければならない。それではそのような段階はいかにして生じたのか。私見では、調値の違いがこの状況をもたらしたと見なすのが妥当であろうと思う。唐代長安音において、平声は最も低い調値であり、有声の氣息を伴っていたが、他の声調はおおむね高い調値であったため、いくぶん喉の緊張を伴い、有声の氣息がほとんど出なくなった、と考えられる。

唐代音の調値については、従来から声明、古写本の声点、文献の記述などを利用した金田一春彦(1951)によって、平声(とりわけ平声濁音)が低調、上声が高調、去声が上昇調、入声が短促調という調値が想定されていたが、高山倫明(1981)はそれに更なる裏付けを与えた。『日本書紀』古写本の声点を調査した高山氏は、唐代長安音を利用した万葉仮名が用いられている部分(いわゆる α 群)の歌謡において、低調を表す声点が平声字に付され、高調を表す声点が上声字・去声字に付されていることを明らかにした。状況証拠を丹念に集めた金田一(1951)の所論が、ここで信頼に足る対音資料を得たわけである。

過去の自説を簡潔にまとめた金田一(1980)では、平声と他声調を「平仄」という対立でとらえる現象について次のように付言している。

平とは低く終わる声調のことである

仄とは高く終わる声調のことである

つまり「平仄」は「低⇔高」の対立だというのである。中古音の有声音が官話系方言などにおいて、平声では無声有気になり、仄声では無声無気になっているのも、その調値が要因であったと考えられる。

---以上、引用終わり---

3. 吳方言と閩南方言の有声音

低調の有声音が氣息を伴う例としては、吳方言を挙げることができる。上海などでは、語頭の有声破裂音・破擦音は半ば無声化しており、語頭の/b/や/d/は実際には[pɦ][tɦ]のように発音されることが知られている。上海語では有声音声母は全て低く始まり、有声の氣息を伴う。それが無声化へ向かう場合にも、その帯気性は保持されているのである。客家語のように、平仄を問わず全濁音声母が全て有気音になる方言では、上海語のような中間段階があったと考えられる。つまり、全濁音が全て低調に始まった時期があり、そのために有声有気音として発音された段階から、半ば無声化して無声音が有声の氣息を伴う段階を経て、最後に無声有気音になったと考えられる。(誤解を防ぐために付言すれば、このことは当然のことながら、客家語が吳方言から分かれたことを意味しない。型の類似を問題にしているのである。)

これに対して、全濁音が必ずしも低くない方言では氣息を伴わなかった。実例は閩南方言に見られる。閩南方言は音韻として有声音声母を持つが、いずれも氣息を伴わない。その理由はおそらく、閩方言ではアクセント格を有するか否かで高調と低調の交替がある点に求めることができる。つまり、全ての音節が高調に現れうる環境においては有声音に氣息が生じにくかった。有声の氣息を高調で発音するには、かなりの労力が必要となるからである。もっとも、閩南方言の有声音声母は、中古音の鼻音に対応するものであり、今問題にしている全濁音と同一に論じられるのかという疑念を持たれかねない。しかし、中古音の全濁音に対応する声母が、閩南方言では仄声のみならず平声においても多くが無声無気音になっているという事実が、その疑念を払うであろう。平声の中で無声有気音になっているものの中には官話系方言からの影響も考えられるため、多くの無声無気音が見られることが閩南方言の特徴というべきである。現在見られるような閩南方言の声調体系がかなり古い段階から(つまり濁音の清音化が生じた段階から)大差ないものとするれば、全濁音が無声無気音になったのは、有声音声母が頻繁に高い声調として現れることが大きな理由として考えられるのである。

呉方言と閩南方言の例から、有声音声母を持つ音節の調値と有声音の帯気性とは密接に関連している可能性はかなり高いと言えよう。

4. まとめ

帯気性という観点から全濁音声母(無声化したものを含む)を眺めると、大ざっぱに以下の三種に分類できる。

①平声で有気音、それ以外の声調で無気音。

②声調を問わず有気音。

③声調を問わずおおむね無気音。

①がいわゆる官話系方言の型である。②は呉方言のように有声音有気音のものと、客家方言のように無声音有気音のものを含む。③は閩方言である。②と③は声調にかかわらず同じ表れ方をするわけであるから、ある意味では自然な状況と言えるが、①はかなり特殊であり、その現象についての説明が求められる。本稿では、それを調値の高低という観点から説明した。有声音声母を持つ音節が、低調では氣息を伴い、高調では氣息を伴わなかったと仮定すれば、ほとんどの事象を穏当に説明できるのではなかろうか。

<参考文献>

金田一春彦(1951)「日本四声古義」(金田一2005所収)。

金田一春彦(1980)「日本語のアクセントから中国唐時代の四声値を推定する」(金田一2005所収)。

金田一春彦(2005)『金田一春彦著作集』第9巻、玉川大学出版部。

高山倫明(1981)「原音声調から観た日本書紀音仮名表記試論」『語文研究』第51号。

中村雅之(2007)「カールグレン「Compendium」を読む(2)」『KOTONOHA』第58号。